

2014年はどうなる？各女性誌の戦略は…？ 編集長インタビュー


小学館 女性インサイト 研究所
Shogakukan Women's Insight Lab
<http://www.insightlab.jp/>

時代の流れを捉え、また新たな時代の波を作り出す「雑誌の編集長」に2014年の見通しや抱負をインタビューしました。今年はどんな年になるのか？何が流行するのか？また各雑誌が仕掛けようとしていることは何か？

『CanCam』『AneCan』『Domani』『美的』『SAKURA』『和楽』の6誌の編集長に聞きました。

『CanCam』

編集長・井亀真紀



2014年の推しは「アイドル系黒髪美少女」

■今の女の子は、かわいくておしゃれなだけではリスペクトされない。色々な人間関係の繋がりがや、SNS等を駆使して自己発信する力を持ち、さらに自分だけが得するのではなく、自分の周りの人を幸せにするにも気を配れる「賢さ」があることが今時の人気女子の必須条件。

■女の子の「かわいいものオタク化」が進行中。ファッション、コスメ、ライフスタイルすべてに「かわいい」が存在するので、CanCamもジャンルにこだわらず、感覚的なかわいさで五感に訴える誌面作りをしていく。

■空前の黒髪ブームが継続。CanCamでは、黒髪スタイルにフレッシュさや透明感、芯の強さを加えた「アイドル系黒髪美少女」を推していく。

アラサー女子は「スカート！フラット！モノトーン！」

■「若者の〇〇離れ」現象がAneCan読者には見られない。消費意欲と労働意欲を併せ持ち、ショッピングも車も旅行も好き。賢くお金を使うことに興味津々なので、リアルなマネー企画を強化していく。

■2014年の春のファッションは、ブラウスではなくシャツと合わせる「スカート」、ポイントトゥ等でキレイめな「フラットシューズ」、柄物なら「モノトーン」がキーワードとなる。

■バッグの大きさがますます小型化。5年前の0Lと比べて「A4サイズの書類が入ることが必須」ではなくなった。ペーパーレスの影響か。

『AneCan』

編集長・福田葉子



『Domani』

編集長・吉川 純



30代の働く女性は、より豊かな人生へ堅実に邁進中

■圧倒的にパンツ派が多かった働く女性も、フラットシューズやマニッシュシューズの流行で、フェミニンだけではない、スカートの辛口な着こなしに目覚めた。また、世の中の的にもファッションや身だしなみへの気遣いが浸透し、オフィススタイルの許容度があがっていることも、スカートがヒットした一因と考えられる。

■ファッションやヘア&メイクに加えて、ライフスタイルや自己投資に対して読者の関心が急増中。健康維持や習い事、インテリアや気の利いた手土産まで、自分にとっての本当の豊かさを見極めて、トータルで素敵な女性になるための企画への要望が高まっている。

『美的』

編集長・兵庫真帆子



20代から「ほうれい線」や加齢への悩みが深刻化

■20代女子の肌の悩みが「目のシワ」や「クマ」から「ほうれい線」へ圧倒的に変化。2013年に大ヒットした「オイル」美容や「炭酸」化粧品、「クリーム」への関心度の高さなども、若いうちからエイジングケアをしていないと不安に思う人が多いことが伺える。

■なりたい顔が「ハーフ顔」から「和顔」へ、ノーカラーメイクから、カラーメイクへと、長年のメイク人気の傾向が変化。

■化粧品を見抜く力をつけたい、成分表示を理解したいなど、消費者自身が勉強して、自分に合った化粧品を購入する傾向が顕著。その要望に応えられる、より一歩踏み込んだ企画を提案していく予定。

「時短」ブームに拍車。スカートはママたちにもヒット

■キャラ弁や、ママ友のお招き用のお菓子作りなど、ママの「ひと手間」が急増。それに合わせて、以前から人気だった「時短」商品ブームが、より一層盛り上がった。

■ママスタイル定番だったフラットシューズがトレンドとマッチしたことで、「動きやすいから仕方なくぺたんこ靴を履く」から「おしゃれのために自ら進んでぺたんこ靴を選ぶ」へ、マインドの変化。体型カバー効果もある「ふんわりスカート」とセットで今年はますますブームに。

『SAKURA』

編集長・佐藤友貴絵



『和楽』

去年始まった日本文化ブームは2020年まで続く

編集長・橋本記一



■伊勢神宮と出雲大社の遷宮、伊藤若冲ブーム、歌舞伎座のリニューアルオープン、富士山が世界文化遺産に登録など、日本文化や日本美術への関心が高まった2013年。さらなる日本美術ブームのきっかけとして、2014年1月2日から『大浮世絵展』がスタート。続いて2016年の尾形光琳・没後300周年、そこから4年後の2020年の東京オリンピックなど、日本美術にとって大きなポイントとなる出来事が今後目白押し。

■日本美術以外にも「和食」への注目度がアップ。「食文化」としてのみならず、「日本文化」トータルへの関心が世界中から集まっているのを受けて、「日本文化の入り口マガジン」としての役割を強化する。

※今回のインタビューは、小学館女性インサイト研究所が運営する情報発信サイト『Woman Insight(ウーマンインサイト)』に掲載された記事を元に再構成しました。インタビューの全文はこちらのページ

<http://www.womaninsight.jp/?p=53865> から、ご覧いただくことができます。

小学館女性インサイト研究所とは…

2013年5月に発足した、小学館女性誌編集局による研究機関。「女性が何を欲し、望み、どうなりたいのか？」を、雑誌づくりの知見を活かし、目に見える「数値」と目に見えない「声」の両方の側面から調査していきます。8人の雑誌編集長が主任研究員として在籍、所長は女性誌編集局プロデューサーの嶋野智紀が務める。

■このリリースに関するお問い合わせや取材、資料ご希望の方は下記まで■

小学館女性インサイト研究所 (<http://www.insightlab.jp/>) 担当:大野

TEL 03-3230-9774 FAX 03-3234-6557 E-mail pr-islab@shogakukan.co.jp